「防災・災害対応の本質がわかる本」

二宮洸三　著
オーム社，2011年8月
172頁，1600円（本体価格）
ISBN 978-4-274-21067-9

これまで長年にわたって気象研究と気象業務に携わり，災害対応の最前線にも立ち，さらに，今も，現役として気象研究や災害問題について積極的に発言している著者が，東日本大震災を契機として，広い見地から災害と災害対応についての見解をまとめたのが本書である．

先ず，本書の目次を示す．

第1章　災害と災害対応
第2章　日本の気象災害
第3章　地象災害
第4章　人為的災害と地球環境問題
第5章　災害の想定
第6章　災害と情報
第7章　災害対応における計画とマニュアル
第8章　ハザードマップの役割と問題点
第9章　災害対応についての専門的知識と総合的良識
第10章　災害対応にかかわる意思決定と国民的合意
むすび

著者は，「はしがき」において，従来の書物では，災害に関連する自然現象そのものについての説明・記述に重点がおかれているが，さらに大切なのは“総論的な議論”であると考え，第5章以下の総論的テーマに重点を置いてまとめた，と述べている．

第1章から第4章までの内容を簡単に紹介する．第1章では，災害の定義（自然災害と人為的災害の分類）から始め，災害対応の内容について述べ，その中で，防災という用語の英訳，さらにあいまいな日本語表現の問題点について，貴重な指摘を行っている．第2章と第3章においては，気象並びに地象に関する災害や，関連する情報についてコンパクトにまとめられており，その利用価値は高い．第4章では，人災を，事故と地球環境問題に分けて，議論を行っている．本文の内容は興味深いが，重大な事故の事例として表にまとめられている災害事例の選択基準が明確でないように思われる．

第5章以下が，本書の中心的な部分である．第5章では，最近よくマスコミ等に登場する，自然災害対応における「想定」と「想定外」の問題が論じられている．著者は，自然災害対応に関しては，「想定」の範囲は，関係者の“阿吽の呼吸”で決められていることから，災害後にその適・不適や根拠を問われても，個人・組織とも論理的に明確に答えられないのが実情であるとし，むしろ，問題は，根拠がこの程度にあいまいであること，決定の真の責任所在が不明確なことが，当事者にも意識されず，公的に告知されないことであると述べている．最小限，「想定外も起こりうる」，「想定外には充分に対応できない」等，明記が必要であるとしている．

第6章では災害対応における情報に関連して，国並びに地域で策定されている「防災計画」の問題点が指摘されている．また，情報の迅速性と正確性の課題が分析されており，非常時における現実を無視した“無謬性”を追求する社会的風潮について，警告している．さらに，研究成果を災害対応策に取り入れる際の審議会等の問題点，成果を社会に還元する際の研究者サイドの課題等が指摘されている．この章では，新たな切り口として，「災害対応と観測」について論じている．著者は，『観測・観測的研究のもたらす「人類の知的財産を充実」と「短期的に見た実利・実益」との差異について研究者が正確に説明し，社会に理解されなければ，観測の長期的充実はありえない．…（中略）…研究者は期待される研究成果，情報について社会に報告するにとどまらず，その実用的限界を説明し，情報活用の方策についても具体的に提案しなければならない．…（後略）』と述べている．長期的な観測の維持・継続に多くの困難が認められている現状に対する貴重な意見である．

第7章では，災害対応における計画とマニュアルの課題について分析している．著者はこの中で，“完全無謬主義”の問題点を指摘し，『「不可能の最善」を追求せず，可能な次善，三善の対応をよしとする国家的，社会的なコンセンサスの形成が何よりも必要である．』としている．そして，『災害対応の計画書・マニュアルには，予期される災害のグレードと，想定した対応範囲を分離して記載すると同時に，「想定外」の現象・災害のグレードと，不可能な対応も併せて記載すべきである．』としている．

第8章では，ハザードマップの役割と問題点が分析

© 2011　日本気象学会

されており，この中で著者は，「ハザードマップは想定危険域・想定被害域を示す図であり，絶対安全域を示すものではないことを充分に理解してほしい.」と述べている.

第9章では，災害対応に必要な知識・知見が蓄積されているが，充分に活用されていない背景が分析されている．著者は，専門的知識と研究の限界があり，専門研究者の見解を基本的には尊重し参考にすべきだが，災害対応の詳細な具体的事項についてまで研究者に求めるのは，そもそも無理であるとしている．また，標題に現れる「総合的良識」という，あまり聞きなれない言葉は，災害対応に関係する複数の専門分野にまたがる鳥瞰的な良識としてとして著者は捉えており，災害対応が適切になされるためには，専門分野からの見解を聞くに留まらず，縦割り社会を超えた良識をくみ上げることが大切であるとしている．さらに，著者は，災害対応の議論においては，現実的・具体的な考察が重要であるとし，特にメディアの責任等に関して，厳しい指摘を行っている．一読に値する部分である.

第10章においては，災害対応における意思決定過程と責任の問題について述べており，災害対応と想定に関する防災計画等の改善点，災害対応における責任の所在，災害対応に関する意思決定にかかわる責任，司法の責任，国民的合意と国民の責任等について鋭い分析を行っている．特に国民的合意の形成過程について，その問題点が述べられている．傾聴に値する個所である.

今回の東日本大震災，特に，福島原子力発電所の事故に関して，その無責任体制に唖然としているのは，一人評者のみではないであろう．政治学者丸山真男は「軍国支配者の精神形態」において，我が国のシステムに存在する，「既成事実への屈伏」と「権限への逃避」という2つの傾向を指摘し，「無責任の体系」というエトスが埋め込まれていると述べている．寺田寅彦も，「災難雑考」において，「誤った責任観念から色々の災難事故の真因が抹殺され，そのおかげで表面上の責任者は出ない代わりに，…」と述べている．“責任の所在”は，永遠の課題である.

全体を読んでの印象は，非常に豊富で示唆に富んだ内容である．また，各所にみられる「コラム」の内容も非常に興味深いものである．しかし，ページ数の制約からか，もう一歩踏み込んだ，あるいは詳細な議論がほしかったところも随所にみられる．今後，より詳細な検討を行った続編の発刊に期待したい.

読者の中には，今後，防災計画等の見直しに関係される方もおられるかと推測するが，そのような際には，ぜひ本書の内容等を思い出し，計画の修正等に反映させて頂ければと思う.

座右に置いて，災害対応について話題になったり，メディアに登場したときに，報道等と併せて読むと，災害対応の実態がより一層深く理解できるものと思われる.

是非，一読されることをお勧めする.

((財)日本気象協会　藤谷徳之助)